

たこつぼ心筋症の6割で神経・精神障害がみられる

たこつぼ心筋症 (Takotsubo Cardiomyopathy) は、突然発症する左心室心尖部の一過性収縮低下をきたす心疾患で、ストレスが誘因となることがあるため、大規模被災地でしばしばみられる。たこつぼ心筋症の経過や転帰については十分に解明されていないため、本研究では欧州・米国 26 カ所の「国際たこつぼレジストリ」から、たこつぼ心筋症の患者と急性冠症候群の患者について比較し、その臨床経過や転帰を分析した。たこつぼ心筋症の患者 1,750 例のうち、89.8%が女性 (平均年齢 66.8 歳) であった。たこつぼ心筋症の誘因としては、感情的ストレス (27.7%) よりも身体的ストレス (36.0%) のほうが高率であった。28.5%で明らかな誘因が認められなかった。また、たこつぼ心筋症の患者は神経障害や精神障害の有病率が 55.8%と、急性冠症候群の患者の 25.7%と比べ、有意に高かった ($p<0.001$)。また、平均左室駆出率は、たこつぼ心筋症の患者で 40.7%と、急性冠症候群患者の 51.5%に比べて有意に低率だった ($p<0.001$)。ショックや死亡など、重度の院内合併症の発生率は、両群で同等であった ($P=0.93$)。

したがって、たこつぼ心筋症の患者において、神経・精神障害の有病率がおよそ 6 割と急性冠症候群の患者に比べて有意に高いことが明らかとなった。

出典 : The New England Journal of Medicine. 2015; 373(10): 929-938